

等位接続と従属接続

古賀恵介

1. 英語における等位接続と従属接続は何がどう違うのか

英語には、等位接続詞 (and, but, or, for, etc.) と従属接続詞 (though, if, because, etc.) を用いた2種類の接続形式が存在する。(本稿では、従属接続は副詞的なもの、等位接続は定形節どうしの接続に話を限定する。) 両者は、以下の (1)-(2) にあるように、意味的に同等と考えられる関係 (この場合は逆接関係) を、どちらでも表現することができる。

(1) John is rich **but** he is unhappy. (等位接続詞 but を使用)

(2) **Though** John is rich, he is unhappy. (従属接続詞 though を使用)

従って、その違いは、一見、意味とは独立した純粋に形式的・統語的なものであるかのように思われる。だが、それを認知言語学的に捉え直すと、どのような面が見えてくるであろうか。また、等位接続詞の用法には、(3) のような連結型と (4) のような分離型があるが、その違いは理論的にどのように説明すべきであろうか。

(3) Mary loves John(,) but she didn't marry him.

(4) Mary loves John. But she didn't marry him.

本稿では、この2つの問題の背後にある概念構造のあり方を、認知文法 (Cognitive Grammar) の理論的枠組みを用いて説明する。(認知文法理論の詳細については Langacker (2008) 等を参照のこと。)

2. 認知文法の基礎的諸概念

認知文法においては、基本的に、語句の背後にある概念構造 (≒意味) において、その構成要素の間に概念的際立ち (conceptual salience) の非対称性があると仮定されている。つまり、概念内容において、その一部分に際立ちが与えられて前面化し、他の部分は背景化するということである。この前面化した部分を **profile**、背景化した部分を **base** と呼ぶ。また、基本的品詞のうち、名詞はモノ概念 (**thing**) を表すが、それ以外の品詞は関係概念 (**relation**) を表し、関係概念の構成要素の間にも概念的際立ちの非対称性があるとされる。そして、そのうち際立ちの高い要素を **trajector**、低い要素を **landmark** と呼ぶ。

関係概念の構成要素は、他の概念により具現化されることで統語関係を構成するが、その際、上位構造においてあらためて全体の **profile** が何であるかが決定される。例えば、形容詞は名詞と結びつくことでその **trajector** が具現化されるが、その全体構造の **profile** が名詞の場合は修飾構造、形容詞の場合は叙述構造となる。

(5) a. BEAUTIFUL + FLOWER (太字部分が全体の **profile**) ⇒ (the) beautiful flower (修飾構造)

b. BEAUTIFUL + FLOWER (太字部分が全体の **profile**) ⇒ (the) flower (is) beautiful (叙述構造)

そして、修飾構造においては形容詞は背景化し、**base** の一部となる。つまり、上位構造においては、それを構成する個々の語句の中での **profile** とは別に、全体の **profile** が独自に決定されるのである。

3. 認知文法における等位接続と従属接続

一般的な認識では、等位接続は2つの節を文法的に同等の地位で結び付け、従属接続は一方の節をもう一方の節に従属させる形で結び付けるものとして捉えられている。この二者の違いは、認知文法では上位構造におけるプロファイル決定のあり方の違いとして説明できる。即ち、従属接続においては、(6) のように主節が文全体の **profile** となり、従属節の方は **base** となって背景化するのである。(なお、副詞的従属接続には更なる下位分類 (e.g. Quirk et al (1985) のいう **adjunct**, **disjunct**, **subjunct**) が存在するが、その議論は本稿では割愛する。それらの従属節の認知文法的な分析については、古賀 (2010) を参照のこと。)

(6) **John is unhappy** though he is rich. (太字部分が **profile**、それ以外が **base**)

これに対して、等位接続の方は、(7) のように両方の節がどちらも **profile** となり、いわば対等の関係となる。

(7) **John is rich** but **he is unhappy**.

両者のこのような概念構造上の違いは、その基本的統語特性にも反映されている。即ち、(8) にあるように従属節は主節から切り離されて文 (**sentence**) として独立することはできない。

(8) John is unhappy. *Though he is rich.

従属節はあくまで文の背景部分 (**base**) としてしか機能し得ないため、独立文を構成できないのである。これに対して、等位接続では、(9) のように後続節を独立文として切り離して用いることができる。

(9) John is rich. But he is unhappy.

等位接続では、先行節・後続節のどちらも独立文の *profile* としての性質を備えているからである。

また、従属節は、主節に対する *base* として統語的な付加部を構成するので、主節に先行することも後続することもできる。対して等位節の場合、後続節を前置することはできない。(なお、従属節が前置された場合と後置された場合、また、後置された場合における一体型と補足型(コンマの有無)では、文焦点の所在という形で情報構造上の違いが生ずるのだが、その議論はここでは割愛する。cf. Verstraete (2007) ほか)

- (10) a. *Though John is rich, he is unhappy.* (cf. **But he is unhappy, John is rich.*)
b. *John is unhappy(.) though he is rich.*

英語では、副詞句や前置詞句のような背景の要素は、以下のように、文の主要部分に対して前置したり後置したりすることができるが、副詞的従属節もそれと同様に働くのである。

- (11) a. *Despite his huge wealth, John is unhappy.* b. *John is unhappy despite his huge wealth.*

4. 等位接続における節の非対称性と後続節の独立化

前節の議論では、等位接続において後続節が独立文として分離することができるという事実を、文としての *profile* を持つという点から説明したが、その場合の接続詞自体の概念構造のあり方 (e.g. 2 つの節のうちどちらが *trajector* で、どちらが *landmark* なのか) はどうなっているのであろうか。

認知文法では、接続詞は関係概念表現の一種で、関係概念は通常 *trajector* と *landmark* を持つ。従属接続詞の場合は主節が *trajector*、従属節が *landmark* となることは明らかだが、等位接続詞の場合、先行節と後続節が両方とも全体構造の *profile* をなし、一方から他方への統語的従属関係がないことも考慮すると、両者の関係は (12b) のような純粋に対称的なもの (つまり、どちらも *trajector*) であるかのように思われてくる。

- (12) a. *A though B* (A---*trajector*, B---*landmark*) b. *A but B* (A---*trajector*, B---*trajector*)

しかし、等位接続詞と節の結びつきの強さという点では、先行節と後続節は決して同等ではない。以下のような統語的な事実からわかるように、接続詞と後続節の方がより密接に結びついているのである。

- (13) a. *John is rich, but he is unhappy.* b. **John is rich but, he is unhappy.* (書記言語での標準的記法)

- (14) a. *John is rich. But he is unhappy.* b. **John is rich but. He is unhappy.*

つまり、等位接続詞は両者を単純に連結しているわけではなく、先行節の内容を踏まえた上で、それに後続節を追加するという心理的機能を果たしていると言える。従って、この点での非対称性を理論的に捉えようとするれば、等位接続詞の概念構造は、後続節が *trajector*、先行節が *landmark* であり、その働きは先行節の内容に後続節の内容を *profile* として追加するということになるであろう。また、(13a) のような連結型においては、*landmark* である先行節は同じ文内で統語的に具現化されているが、(14a) のような分離型では、*landmark* は統語的には省略されていて、談話的に具現化されているというふうに言える。

この点で興味深いのは、*however* のような接続副詞との比較である。(15) にあるように、接続副詞は、分離型等位接続詞と同様に、先行文への後続文の意味的關係を表すのみで、節どうしを連結する機能は持たない。

- (15) a. *John is rich. However, he is unhappy.* b. **John is rich, however he is unhappy.* (標準的書記言語)

これは、接続副詞があくまで副詞(後続文の付加部)であり、接続詞ではないということに起因している。つまり、*landmark* たる先行内容は談話的に具現化されるのみで、統語的に具現化されるわけではないということである。また、接続副詞の副詞としての性格はその出現場所のあり方にも反映している。

- (16) a. *John is rich. He is, however, unhappy.* b. *John is rich. He is unhappy, however.*

副詞(文副詞の一種)であるため、(16) にあるように、挿入的に用いたり付加的に用いたりすることもできる。これに対して、(17) にあるように、等位接続詞の方はそのような用い方をすることはできない。

- (17) a. *John is rich. *He is, but, unhappy.* b. *John is rich. *He is unhappy, but.*

たとえ分離型になった場合でも、接続詞としての概念構造は維持されたままだからである。分離型等位接続詞の *landmark* が「統語的には省略され、談話的に具現化されている」と述べたのは、このような背景があつてのことである。

主要参考文献

- 古賀恵介 (2010) 「副詞節の修飾構造」 『福岡大学人文論叢』 42, 131-161.
Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press, Oxford.
Quirk et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman, London.
Verstraete, Jean-Christophe (2007) *Rethinking the Coordinate-Subordinate Dichotomy: Interpersonal Grammar and the Analysis of Adverbial Clauses in English*. Mouton de Gruyter, Berlin/New York.